登美ヶ丘茶論（サロン）（28）

2022 年 4 月

改憲 ー 憲法九条への「自衛隊明記」と「緊急事態条項」の創設 ー は 自衛隊と国民をアメリカの戦争に総動員することです！

プーチンと友達という総理いた

罪深いリーダー選び悔やむ民

連合と自民が野合する悪夢

◆ 吉本隆明と憲法九条

吉本隆明(1924～2012)は戦後最大の「思想の巨人」と評されるが、毀誉褒貶相半ばする人物でもある。論敵(特に革新政党や進歩的知識人)に対する批判は激烈なものがある。その彼が一貫して若者に人気があるのは、彼の思想が自らの生活の中で全存在を掛けて築いて来たものであるからだ。ただし、護憲派の知識人には評判は悪い。

その彼だが、「憲法九条の精神」についてだけは絶対と言える信頼を置いていた。まとまった論文などは見当たらないが、時代の変遷の中で発言している。彼の晩年の発言を年代順に以下に紹介する。(彼の生の言葉には力がある。この要約文では物足りないかも知れないが。)：

1992 年頃。九条は先の大戦の敗北から獲得したただ一つの宝物。理想の未来に行けるただ一つの細い通り道だ。私の夢だ。この夢と現実が衝突するところが私の戦場だ。

(社会主義国)ソ連も中国も「軍隊」を憲法に謳っている。だから憲法九条を信奉する日本の進歩的知識人は両国に異議を申し立てるべきなのにそれが出来ていない。両国を相変わらず平和勢力と呼んでいる、そこがおかしい。(投稿者注。ロシアのウクライナ侵攻、中国の武力の誇示は、今日なら進歩派も批判出来るだろう。)

1994 年頃。村山内閣は「自衛隊は合憲」と、国民の了承という手続きなしに公式発言した。従来の観念は「自衛隊は違憲」。しかしどんどん膨れ上がって行く。こんな矛盾が何故続いているのか。　その理由。

1、もう戦争はいや！国民の切実な心情。

2、保守派、憲法変えたいが、国民の心情を逆撫ですることは面倒なので、そのままで軍備拡張。

保守は堂々と改憲訴えることできず、革新は堂々と反戦理念を貫くことが出来ない。拱手傍観の意気地なさ。村山発言で自衛隊の明記を主張する政治家が出てくる。

1995 年頃。日本はアメリカの核の傘に保護されているとの主張あるが、私はそうは思っていない。武装力が国際間における国家の強さだという「原則」は認めない。日本も主体性は持ち得る。

日本が核武装するといっても、米ソを越える力など持てない。それより九条を理想の原則として、そこから軍事力の解体の方に持って行くことが現実的だ。

米国は軍事力で怖いところもあるが、アメリカンデモクラシーがあって、世論も通る。結構筋が通る。(ただし米国には反省、内省という慣習、観念が無いのが欠点だ。)

2000 年頃。近代国家は変わらないと思っている知識人が多い。それは間違いだ。国家は過去も変わって来たしこれからも変わっていく。先進諸国の課題は、国民や他国に対してどう国家を開いてゆくかだ。国家の変化も「段階」がある。経済、文化に応じた「段階」がある。この発想が日本のオピニオンリーダーの知識人に全くない。

2002 年頃。国民国家とか民族国家とかの概念には何の根拠もない。将来はゆるやかな国家連合に向かうのではないか。種族は問わない。レーニンもハッキリ言っている。「国家がある限り人間が本当の平等や自由は得られない」。大切なのは歴史と文化の発展段階におけるそれぞれの自由確保の論理。発展段階ごとに異なる。

九条を持つ日本が出来ることは多々有る。平和のための提案をすること。紛争地域の和解条項提示や調停役など。自衛隊について、領土領海内で攻撃受けたら応戦出来るのは当たり前だ。報復攻撃は駄目だ。

2002 年頃。米国大統領ブッシュがいう自由は、勝者の自由だ。せいぜい企業の競争の自由だ。この扇動に日本の政府も知識人も無批判に従属している。アメリカが日本を守っているとの観念は間違いだ。日本は （裏面へ→）

東登美ヶ丘Oさんよりカンパいただき
ありがとうございました

精一杯以上の負担をしている。(ここが一番の癌だ)

「公」と「私」。公を建前にする社会には嘘が有る。かっての日本の(東洋の)価値観は「公」が「私」よりも上だった。しかし、公は個人の総和だから個人を越えて公があるわけではない。庶民は「自分や自分の周りのことに」圧倒的に時間を日々使っている。庶民にとって公は切実な問題ではない。

2004 年頃。アメリカでは、戦争の真っ最中でも反戦デモが起こる。つくづく感心して来た。アメリカ人は多元的重層的だ。日本人は付和雷同性強く同調圧力強い。この差を是正する為には。
お国のためとか、正義のためとかあまり言うな。自分達の価値観を押し付けるな。こちらはこうするがそちらはそちらの判断で好きな様にやってくれ。と振る舞えるかどうかだ。

2008 年頃。ぼく(吉本)の敗戦期の実感(戦争は間違っていた、事実を知らなかった、だまされていた)は当時の万人に通じるのではないか。7～8 割の日本の人がそういう気持ちに襲われただろう。(そんな敗戦実感を最近覚えることもある。第二の敗戦だ。投稿者注。吉本氏はこの頃から体調を悪くして、準備していた仕事のいくつかも整理出来ないでいると述懐している。)

以上、毀誉褒貶多い吉本隆明の晩年の憲法九条観を、講演集や対談記録集などから拾い出した。「九条の精神が、未来へ行けるただ一つの細い通り道だ」という原則的信念は終生変わらなかった。彼の言葉には力が有る。(何故か。某専門家の解説、御参考までに：①自己相対化ができている。一庶民として自分のこと全てを表現できる。②見切る。疑問は腑に落ちるまで究明する。③知を捨てる。もの言う時は自分の言葉で喋る。)(SS さん)(ゴシックは編者)

◆ 「吉本隆明と憲法九条」を読んで

ご投稿いただいた「吉本隆明と憲法九条」とても興味深く面白く、そして共鳴して読ませていただきました。１９６０年私の学校では吉本隆明はもうかなりの人気の政治評論家で、仲間内で彼の言うことには賛否両論がありました。私はあまり興味は持っておりませんでした。どちらかと言うと『右翼のような人』だと買った本も『積ん読』していたのです。しかし、１、憲法に軍隊を謳わず九条を掲げているのは日本だけである。・・(だから九条を大切にする日本共産党はソ連中国共産党と全く異る)２、「戦争はもういや」という国民の切実な感情が保守革新両方の理念実行に大きく影響を与えている。３、アメリカが日本を守っていると言うのは間違い。九条を持つ日本が独自に出来ることは多々ある。４、公を建前にする社会にはウソがある。５、お国の為に正義の為にと言うな、自分の価値観を押し付けるな・・・吉本先生の晩年になるほど私は共鳴するような気がしました。最近私は自分を疑っております。どうやら私はガンジーのような本当の平和主義者ではないように思うのです。戦争はいかん軍隊はいかん武器はいかんと思いながら、街宣でウクライナ国家等を歌っていると、自分は殴られたら殴り返すし、武器がそばにあればそれを持って戦ってしまうように思うのです。「栄光の国ウクライナ自由は滅びず、友よ定めは我らに再びほほ笑む太陽を浴びた露のように敵は消え失せ・・この身もこの心もただ自由の為に示せよ我らがコザックの誇りを」
聞く人の中には『やっぱ軍隊は必要かな？』なんて思うのではないかと心配します。
ここん所『私はもしかするとエセ平和主義者？』と悩んでおり乞うご指導。(秋山)

皆さまのご投稿をお待ちしています。掲載時、投稿者は匿名扱いとします。原稿は以下の世話人ポストへ放り込んでください：石田(松陽台 2-16-4 ☎46-0352)，赤沢(鳥見 2-5-1)，秋山(東登美 4-22-19)，藤田(西登美 4-17-4)，堀江(西登美 1-20-7)，宮田(鶴舞西 2-10-C505)，籾谷(中登美 4-1 ローレル I -7-204)，森本(西登美 1-22-21

登美ヶ丘九条の会

よく喋る知事だがコロナ死者トップ

どさくさにまぎれて本音核共有

やられたらイヤだからやるなんてイヤ

核兵器無ければ起こらぬ核の危機

トルストイ読んでないやろプーチンは

戦争よりトロイカ似合う雪の道